



冬の身近なホオジロ類 だったけれど…

カシラダカ *Emberiza rustica* は、日本へ冬鳥として渡来するホオジロ類。亜種カシラダカ *E. r. latifascia* が琉球諸島から本州に渡来します。青森・佐賀・対馬では夏の観察記録もあるようですが(日本鳥学会, 2012)、繁殖記録はないようです。

香川県へも冬鳥として渡来し、まばらな林・農耕地・河川敷や湿っぽい荒地などで見られます。1986年には「多数渡来した」(岡内, 1968) ようで、200羽の群れがいたと聞いたことがあります。

また、1999年の文献でも「数羽から数百羽の群れで草の種子を食べる。」(1999, 第53回愛鳥週間「全国野鳥保護のつどい」記念誌編集委員会) という記述があるように、1990年代でもそこそこ出会いやすく、大川山や大滝山の山頂で、30羽前後の群れに出会った人も多いのではないかと思います。感覚的には、出会いやすさはホオジロ>アオジ>カシラダカ>ミヤマホオジロ>ホオアカ>クロジという順番ではなかったでしょうか(個人差があります)。

ところが年を経るにつれ、カシラダカに出会う機会は減少しているように感じました。以前は数十羽の群れに遭遇することも珍しくなく、「何もいないけれどカシラダカだけいた」ということも多かったのですが、2000年以降、多数の群れが見られるポイント自体が珍しいという雰囲気です。11月・12月に本会が開催する土器川生物公園での観察会でも観察されますが、往時と比べると「少ない」と言わざるを得ません。



▲カシラダカ PHOTO©城戸崇雄 坂出市王越町木沢 2009.3.1

IUCN のレッドリスト 見直し

さて、こうした感覚を裏付けるように、先日 IUCN (International Union for Conservation of Nature 国際自然保護連合) のレッドリストにおけるカシラダカのカテゴリが軽度懸念 (LC) か絶滅危惧 II 類 (VU) に変更されました。

IUCN はレッドリストの老家。日本でも環境省が「絶滅のおそれのある野生生物の種のリスト」を作成しており、こちらもレッドリストと呼ばれますが、そのカテゴリは IUCN に準拠しています。IUCN でのカテゴリの変更がただちに日本の環境省レッドリストの見直しに繋がるわけではありませんが、今後の方向性を示すものと言えるでしょう。

2016年12月8日のバードライフ (IUCN レッドリストの鳥類部門の策定機関) のプレスリリースによると、変更の理由は近年の研究により、「過去30年の間に75-87%もの個体数が減少した」ことが明らかになったため。減少の原因としては大規模な捕獲や越冬地の農耕による影響などのようですが、具体的な情報は今後明らかにされるでしょう。

ちなみに、環境省レッドリストでの絶滅危惧 II 類 (VU) は、スズメ目ではサンショウクイやアカヒゲ、コジュリンなど。身近な冬のホオジロ類であるカシラダカが、これらと同じカテゴリということに違和感を感じる方もいるかもしれませんが、「世界レベルで見れば危険なほど激減しつつある」ということです。

今後はどうなる？

世界的な傾向を踏まえれば、今後、日本に渡来するカシラダカは減少はしても、増えることはなさそうですねとすれば、何ができるでしょうか。大規模な保護は無理としても、現在カシラダカが渡来している環境は、少なくともそのまま維持することが望ましいと言えるでしょう。また、いつ・どこで何羽が観察できたか、というデータをきめ細かく残していくことも重要と考えられます。どのような環境（標高・植生等）がカシラダカに適しているのかが分かれば、どのような環境を積極的に残すべきかも検討できます。

増えてく野鳥がいれば、減少する野鳥もいる。もちろん自然界のバランスによる面もあるますが、現在の野生生物の減少は、人間の活動に起因するものが少なくありません。数十年後、「昔はカシラダカが見られていた」と語らずにすむように、「できること」を考えていきましょう。

(参考文献)

- ・1968, 岡内英孝. 香川県に於ける野鳥の生態, 岡内英孝
- ・1999, 第 53 回愛鳥週間「全国野鳥保護のつどい」記念誌編集委員会(編集協力)日本野鳥の会香川県支部. 香川県鳥類リスト, 第 53 回愛鳥週間「全国野鳥保護のつどい」記念誌「かがわの野鳥」,香川県
- ・2016, 「バードライフ・インターナショナルは IUCN レッドリスト 2016 鳥類部門を 改訂しました」2016.12.8. 一般社団法人バードライフ・インターナショナル東京 報道発表
- ・2012, 日本鳥類目録改訂第 7 版, 日本鳥学会